

『マスターとマルガリータ』における 《頭部》シンボルの意味

秋 元 里 予

『マスターとマルガリータ』(以下MM)において頭部モチーフが重要である事はビーティとポーウェルの共同研究⁽¹⁾(以下BP)の中で指摘されている。本稿ではこれに基き、頭部モチーフの意味を検討し、上の研究では解明されていないモチーフと思想との関連へと論を進めていきたい。

BPは次の5つの主要な頭部イメージを挙げている。——1. ポンティウス・ピラトがイエシュアの頭があった筈の空中に冠をかぶった頭が浮いているのを見る (p. 61), 2. ベルリオーズが路面電車で頭をはねられ、その頭部が道端に転がる (p. 61), 3. コロビヨフが黒魔術ショーの司会者の頭部をもぎ取る (p. 160), 4. ヴァラエティ劇場の主脳部が消える, 5. アザゼロがサタンの宴でベルリオーズの断ち切られた首を皿に載せて運んでくる (p. 345)。

BPの分析から我々は次のような総合を得る事ができる。即ち頭部モチーフは 1. 断ち切られた頭部, 2. 病気の頭部, 3. アダムの頭蓋に分類され、それぞれ、1. 肉体の死後生き続ける精神(不死), 2. 絶えず人間を悩ますこの世の生(不安), 3. アダムの墮落によって等しく人間に負わされるようになった罪とそれに対する罰としての死(罪・死)のシンボルになっている。これについて以下で詳述しよう。

まず第一にMMにおいて断ち切られた頭部は皆生き続けている。黒魔術ショーの司会者がその例である。また比喩的に断ち切られた頭部であるヴァラエティ劇場主脳部は、ヴォラント一団の騒ぎの後、各人が別の場所で働くようになるが、これは胴体(劇場)を離れた頭部(主脳部)が生き続ける事を意味する。そして最も重要なのはベルリオーズの断ち切られた首である。このイメージは複雑である。ベルリオーズは「幻想交響曲」の作曲者であり、その中で彼のアルター・エゴは死刑台で断首された後、悪魔の宴に行く。これはMMのベルリオーズが断首され、ヴォラントの宴に連れて行かれることと観念連合をなしている。一方、名前とは別の面で、断首される登場人物の役割を検討すると、そ

れが思想的な面で重要である事——ベルリオーズの断ち切られた首がヴォランドの理念の証明に用いられている事——が分かる。作品の冒頭部、ベルリオーズはイワンに神の非存在を説く。そこへヴォランドが割り込んでくる。二人はカントの神に関する証明から悪魔の存在へと議論を進める。これは、言うまでもなく、「悪魔の存在即神の存在」を主張するイワン・カラマゾフの夢魔の弁神論が念頭に置かれている。イワンと夢魔はカントが理性の領域における証明を断念した三つの問題（神の存在・魂の不死・自由）を論じ合う。ベルリオーズとヴォランドの論題も同様である。しかしドストエフスキーの中では幻想として終えられた悪魔の存在がブルガーコフでは現実化されている。つまり後者はカントとドストエフスキーの躊躇を物ともせず神の存在と死後の生命を確言している。

ヴォランドは、ベルリオーズが首を断ち切られて死ぬ事、彼の50号室に自分が住む事を予言し、それが適中することによって、悪魔の存在が証明される。この悪魔の存在証明はヴォランドの語ったエルサレムの事件、即ちイエスの存在をも証明している。そしてベルリオーズの首が悪魔の宴に運ばれてきた時、ヴォランドは人間の死後の生命（魂の不死）を証明する。これはイワンの夢魔が語る、自らの死後初めて不死を知った思想家の話と呼応している。イワンと夢魔との対話はブルガーコフにとって重要な意味を持ち、『白衛軍』のアレクセイの夢に現れる悪魔は「格子縞のズボンをはいた」イワンの夢魔で、一方この作品の戯曲化の際、最終的には削除されたが、イワンの夢魔は登場人物の一人に加えられていたほどである^[2]。『白衛軍』は黙示録の形式を借りて神の国の到来を予言しているが、その中では発展しなかったイワンと夢魔の対話は、MMにおいて、ドストエフスキーの登場人物の複合的形象化によって完全な形で甦る。イワンはイワン・ベズドームヌイに、夢魔はヴォランドに、無神論の思想家はベルリオーズに呼応している。問題は、この対話化された思想がブルガーコフにおいてはモスクワ物語とエルサレム物語の二重構造をとって表現されることにある。

モスクワ物語でヴォランド、ベルリオーズ、イワンの対話として現れる神の存在、不死の問題はヴォランドの語るエルサレム物語の中で繰返されている。神の問題はイエシュアとピラトとの対話の中に、不死の問題はピラトの直観として現れている。

ピラトはイエシュアの裁判の際、不可解な憂悶を感じる。そしてこれは不死の想念と相まってピラトに付きまとい、特に彼がカヤバにイエシュアの死刑承

認を言い渡す時頂点に達する。既にピラトがティベリウス帝の幻影を見た時、それは彼の頭に閃いている。即ちイエシュアの死刑承認の義務を感じず時、常に憂悶と不死の想念が閃く。これは次の事を意味する。ピラトにとってイエシュアの死刑承認は良心の苛責（憂悶）を感じさせる事である。だが「あらゆる権力は人々に対する圧制である。いつか皇帝の権力も他のいかなる権力も存在しない時代が訪れる」(p. 41) という理念を唱道するイエシュアを庇えばピラトは「皇帝陛下に対する冒瀆に関する法」(p. 39) を破る犯罪人を看過したとして咎められる事になる。それ故ピラトは死刑を承認する。その時ピラトは救いようのない憂悶を感じずるのだが、それが永遠に終わらない事は認識していなかった。

しかし彼は自分の判断の誤り、そして不死が存在し、それ故自分の憂悶が永遠に続くことを直観的に理解していたのである。ブルガーコフの意図は、もしピラトがこの直観を無視せず、不死の存在を認識していたなら、必ず彼は永遠に続く良心の苛責よりこの世で皇帝ティベリウスから課せられる罰の方を選んだであろう事を示す事にある。

ところでブルガーコフはピラトの直観をつばめというシンボルで表わしている。つばめが最初に登場するのはピラトがイエシュアに好感を抱くようになった時である。その描写はピラトのイエシュアに対する無罪判決の構想の叙述を挟んでいる⁹⁾。この事からつばめの飛翔とピラトの思考とに関連性のある事が分る。特筆すべき事に、「そこ（柱頭）に巣を作ろうという考えがそのつばめの頭に閃いたのかもしれない」(p. 38) という指摘が挿入されている。つばめが或る観念のシンボルだとするなら、それがバルコニーの柱頭に巣を編むとは或る観念が人間の頭に巣食う事即ち固定観念 *idée fixe* になる事を意味する。これはピラトが或る観念、後の叙述の中で明らかにされる「何か被告と話し足りなかったのではないか、聞き足りなかったのではないか」という後悔の念に苛まれる事を暗示している。

ところでつばめが飛び去った後、ピラトはイエシュアの審理を続け、書記から渡された訴訟事件の書かれた羊皮紙を見て愕然とする。そこにはイエシュアが皇帝冒瀆の罪に値する言動をとっていた事が書いてある。そして、ピラトには「束の間の、脈絡のない異常な考え」、「『破滅だ!』」「『もろともに破滅だ!』」という考えが、そして同時に何か全く馬鹿げた考え、不死という様なものについての考えが浮かび、しかもその不死が何故か堪え難い憂悶を呼び起こす(p. 40) す。そして、ピラトはイエシュアに皇帝を冒瀆したか否かを尋ねる。その

際、目配せをして「否」と答えるよう示唆する〔「ユダヤ総督は太陽の光線を避けるように手をかざすが、この手を盾の代わりにしてその陰から囚われ人に何か合図のような目配せを送った。」(p. 40)〕が、それにも拘らずイエシュアは自分がユダに「全ての権力は人々に対する圧制である」と語った事を表明し、ピラトは彼の死刑判決承認を余儀なくされる。そしてイエシュアの血の責任が自分にはないのだと言う様に手を洗う仕草をし〔『『忌わしき町め…』と突然何か総督はつぶやき、あたかも寒気がしたかのように肩をひきつらせ、あたかも水で洗い流すかのように両手をこすった』(p. 43)〕、ピラトはイエシュアに死刑の判決を下すが、ここで再度つばめが登場する。つばめのいる時にはイエシュアの死刑判決を却下しようという考えを持っていたピラトがつばめのいない間にその判決を承認しようという考えを持つようになる。そして彼が死刑承認を宣言する直前つばめが入ってくる。彼はそれを恐ろしい目つきで睨み、鳥を追い払うように大きな叫び声を出して書記を呼ぶ。このようにピラトは何か自分に浮んだ考えを振り払おうとする様な仕草をする。この部分の叙述は次に引用するカヤパとの対談におけるピラトについての叙述と呼応している。「既にバルコニーにいる時に何度か生じた得体の知れない憂悶が今再び彼の全存在を貫いた。彼はすぐこれを釈明しようとした。だが得られた解釈は奇妙なものだった。総督にはぼんやりとこんな考えが浮んだ——何か被告と話し足りなかった事があるのではないか、或は何か聞き足りなかったのではないだろうか。

ピラトはこの考えを追い払った。するとそれは飛んで来た時と同じく一瞬の裡に飛び去った。それは飛び去り、憂悶が釈明のつかぬままに残された。何となればもう一つの考えが稲妻のようにほんの一瞬間き、たちまち消え去ったのだが、これもその憂悶を釈明してくれはしなかったからである。それは《不死…訪れたのだ、不死が…》という考えだった。誰の不死が訪れたのだろうか？それは総督には分らなかった。だがこの不可解な不死についての考えが閃いた刹那、彼は焼きつけるような陽射の中で身の凍る思いがした。」(p. 47)

この引用の中で、考えが「飛び去った」「飛んで来た」という表現は注目されるべきである。これをつばめの飛翔の叙述と比較すれば、この鳥がピラトの直観のシンボルである事は明らかである。ピラトは死刑判決を却下し、自分の駐在地カイザリア・ストラトーンに置いて、イエシュアの思想を聞き、考えを一つにしたいと直観的に考える。——これは最初につばめが飛んで来た時に彼の頭に浮んだ公式であり、また、死刑を宣する直前再びつばめが飛び込んできた時彼が必死で追い払おうとした考えである。あとの場合ピラトが「儂はお前

と考えを同じくしておらん」「黙れ」(p. 43) と叫ぶのは、最初に浮んだ公式を否定する為で、その直観のシンボルであるつばめを睨み、叫び声で追い払おうとする事はこれのシンボリスティックな表現である。このようにつばめは、イエシュアの死刑を承認すべきではないというピラトの直観のシンボルである。問題はこの直観と同時に不死の直観がピラトを訪れている事である。

ピラトが直観的に把えた不死という考えを完全に認識するに至るのは、ベルリオーズと同じ様にこの世の生命を終えて不死の存在を目のあたりにした時の事である。

ところでベルリオーズの中に複合的に形象化されている無神論の思想家の話に続いて、イワンの夢魔は次の様に語っている。「…今じゃ、だんだん精神的な責苦ってやつが流行^{はや}ってきてますよ。《良心の苛責》だの、その類のくだらないものばかりがね。[…] それじゃあどんな奴等が勝ちかと言えば、良心を持たない奴ばかりなりってね。良心なんてものが全くなかったら、苛責も糞もありゃしませんからね。そのかわり苦しんだのはちゃんとした人間たちだ。相も変わらず良心だの誠実だのを持ち合わせているもんだから…⁽⁴⁾。」

説明を加えるまでもなく、ブルガーコフはこの不死を信じない思想家の伝説に挿入された《良心の苛責》という問題をピラトの形象を通して復活させているのである。ピラトは良心を持つ人間だった為にその苛責という罰を受ける。これに対し良心を持たない人間、例えばイエシュアをカヤバに売っても罪と感ぜないユダのような人間は苛責という罰を受けない。但しブルガーコフにおいては忍従や正義の問題はゲーテのマルガレーテ (MMのフリーダに形象が複合されている) やドストエフスキーの《虐げられた人々》の様に忍従だけが勝^{まさ}ってはならず、マステルを虐げた批評家の家を魔女となったマルガリータが破壊する様に、またイエシュアを虐げたユダをピラトの派遣した秘密警察が殺害する様に、良心を持たない人間は内なる苛責の代わりに外からの罰を与えられている。畢竟ブルガーコフはイワンと夢魔との対話において語られた不死を信じない思想家の伝説と良心を持つ人間が死後も猶受け続ける苛責の問題を、ベルリオーズとピラトに鑄込み、両者の死後の存在を現実として描く事で、不死と神の存在、死と悪の自由をめぐるイワンと夢魔の対話を止揚させたのである。そして作品内に繰返し現れる胴体から切り離された後猶生き続ける頭部は、不死のシンボルであると結論できる。

さて第二に、「病気の頭部」を検討する。ここで問題にするのは 1. ピラトの頭痛, 2. ティベリウス帝の頭部の幻影である。まず初めに MM における断ち切られた頭部が死後生き続ける精神のシンボルであることから考えて, ブルガーコフが全人間存在の集約的・統合的位置としての頭部という観念を持っている事を念頭に置いておく必要がある。次に, ピラトと同様, 『悪魔叙事詩』の主人公コロトコフが絶えず不安に悩まされ, しかもピラト同様, 頭痛というモチーフに関連する事を思い出さなければならない。以上の二点から, ピラトの頭痛が彼の間人存在を支配する不安のシンボルであるという第一の結論が導き出される。問題はティベリウス帝の頭部が, ピラトを不安にさせ, 破滅へと追いやるもの, 人間を絶えず追いかけてくる現実, 人間存在につきまとう不安の根源のシンボルとなっている事である。

ところで既に『赤い冠』⁶⁾, 『悪魔叙事詩』の中で人間の頭部は主人公を不安にさせ, しかもその頭部は太陽との観念連合を持っている。この初期二作品と同じく MM でも太陽のモチーフは繰返し現われ, シンボル化されている。且つティベリウス帝の頭部と観念連合を持つ。ここで MM における頭部を初期二作品のそれと比較する為, 以下に二作品の主要な太陽の形象を挙げることにしよう。まず『赤い冠』では 1. 炎暑, ざらざらと輝く太陽, 2. 太陽のように冠を被った破損された頭部。そして『悪魔叙事詩』では 1. 不安に満ちた恐ろしい現実に追いかけられる人間の頭痛, 2. 破滅へと呼び招く太陽。ところで, MM においては総計 54 ページのエルサレム物語の内, 19 ページに太陽が現れる。合計 25 回現れる太陽 (派生語を含む) のほか, 炎暑, 灼熱という語が頻出し, 『赤い冠』と同様, 異常な輝きと熱を放つ太陽の形象がエルサレム物語を支配している (これがモスクワ物語にもパラレルに存在している事は言うまでもない⁶⁾)。太陽はエルサレムを焼きつけ, その町の殆ど全ての存在を苦しめている。焼きつける太陽のイメージは以下のように表現されている。

「何か異常な輝きの様なもので焼きつけていた太陽」(p. 45) 「容赦なき灼熱を避ける為に」(p. 45) 「容赦なき太陽を避けていた」(p. 219) 「太陽は群集を焼きつけ, それを追い返した」(p. 219) 「[犬たちは] 炎暑でへとへとになり, 舌を出して横たわっていた」(p. 219) 「太陽は百卒長をまともに照らしつけていた」(p. 220) 「太陽で煮えたぎっているような銀の輝き」(p. 220) 「太陽で焼き爛れた眼をした [マタイ]」(p. 222) 「[イエシュア] が十字架上で太陽に焼きつけられている」(p. 226)

上の例から分るように, 太陽はネガティブなイメージを持つ。これは, 「何

にもまして僕が嫌悪するのは太陽…である」と告白する『赤い冠』の主人公、即ち作者のアルター・エゴの中にあるのと同様のイメージである。

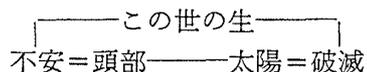
さて、ネガティブなイメージの太陽とシンボル化された頭部は『赤い冠』のコーリャにおいて同一化されている。冠を被り、破損されたコーリャの頭部はMMのティベリウス帝の頭部に影を落としている。次の2つの頭部を比較すると、イメージの類似性は明白である。

《ティベリウス帝の頭部》「この禿げた頭の上には突起の少ない黄金色の冠が載っていた。額には丸い腫瘍ができて皮膚に食い入り、そこに薬が塗られてあった」(p. 39)

《コーリャの頭部》「髪の毛もなければ額もなかった。額のかわりに黄色い突起——それはぼろぼろにかけていた——のある赤い冠があった」(『赤い冠』p. 31)

この類似性から、「赤い冠」と同様MMにおいても太陽と冠を被った頭部と同一化されているという推測が成り立つ。一方、『悪魔叙事詩』からも頭部と太陽の形象が継続している。つまり人間を不安にさせる頭部は『赤い冠』のコーリャの頭部から、『悪魔叙事詩』の《太陽一球一頭部》という観念連合に発展し、更にMMへと繋っている。

ところで『悪魔叙事詩』では主人公が絶えず追いかけてくる現実のシンボルとしての球に屋上へと追い詰められ、太陽の深淵に呼び招かれて身を投げる。この破滅の瞬間、太陽が音を立てて破裂する。丁度これと同じ図式がピラトにも見られる。ピラトはイエシュアの皇帝冒瀆の罪を知った瞬間、皇帝の頭の幻を見る。そして皇帝の怒りを恐れ、死刑を承認するが、この死刑承認はピラトの破滅を意味する。つまり皇帝の頭部がピラトの破滅を呼び招いている。いよいよピラトがヴァルラヴァンの名を公衆の前で叫び、イエシュアの死刑即ち自分の破滅を決定的なものにした瞬間、彼の頭上で太陽が破裂する。このようにMMの皇帝の頭部は『悪魔叙事詩』の主人公の前に現われ、不安と恐怖を与える頭部と同じ意味を持ち、また破滅直前に主人公が仰ぎ見る太陽が破滅の瞬間に破裂する事も二作品に共通している。従ってMMにおいても主人公を不安にさせる頭部が人間を絶えず追いかける現実、この世の生のシンボルであり、またそれが太陽と観念連合をなし、更に太陽が人間を破滅へと呼び招くもの且つこの世の生のシンボルであると推測できる。これは以下の図式に表わされる。



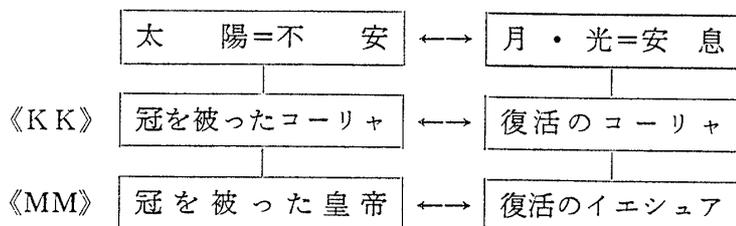
MMにおいて皇帝は見えない圧力として登場し、その存在は癩病の頭部の幻影と（皇帝のいる）「カプリ島の庭園の緑」(p. 39) という暗示によってのみ描かれる。ピラトはイエシュア思想を受け入れたいと思っていたのだが、目に見えない圧力により、無罪の思想家の死刑を強いられる。皇帝がエルサレムの全存在を焼きつける「容赦なき太陽」にシンボル化されている事を以下に述べていこう。

ピラトは裁判においてイエシュアの方を見ると同時に常に太陽を見ている (pp. 33-34)。そして一時治まった頭痛がぶり返す中で、ついに彼はイエシュアと同時にティベリウス帝の頭部を目にする (p. 39)。従って、苦痛の中で見る太陽と苦痛から生じた視覚異常による皇帝の頭部の幻影が観念連合をなす事は明白である。また皇帝の幻影を見た時、ピラトは全てがカプリ島に沈んでしまった様に感じる。即ちイエシュアのいる方向には太陽と皇帝のいるカプリ島とが同時に見えたのである。このように『赤い冠』と同様、MMでも太陽と頭部は観念連合をなす。太陽は容赦なく照りつける凶暴な力であり、コロナと不可分の関係にある。一方ティベリウスはピラトを恐怖させる容赦なき権力者であり、冠（コロナ）を被っている。以上の事は次の例によって裏付けられる。

ピラトは皇帝冒瀆について尋ねた時、「太陽の光線を避けるかのように敢えて片手をかざし、この手を盾にしてその陰から囚われ人に何か合図するように目配せを送った」(p. 40)。つまり彼は自分の手で、自分が盾となって皇帝の権力（太陽光線）を避け、イエシュアを保護する為に目配せしたのである。更に別の例を挙げると、ピラトは皇帝に隠して秘密警察を配下に置いているが、その男とは「暗幕をひいて太陽から見えなくした部屋で」(p. 50) 会い、しかも「その男はこの部屋の中では太陽の光線が不安を与える筈もないのに顔を半分頭巾で隠して」(p. 51) いる。またピラトは民衆の前でイエシュアの死刑を決定的なものにする直前、真上に昇った太陽に焼きつけられ自分一人が全てから隔絶され、孤独の中に立たされているのを感じる。そして、その容赦なき太陽に強いられるかの様にヴァルラヴェンの名を叫ぶと、頭上で太陽が「破裂し、彼の耳を炎で満たしたように」(p. 53) 思われる。この苦悩の炎で彼を満たす現実には永遠に彼を苦しめる。彼は忌むべき過去が消え、月の光の中をイエシュアと逍遙する事を夢みる。太陽に象徴される過去は不安であり、月に象徴されるイエシュアの復活は安息である。また太陽に象徴される現実とは皇帝の見えない圧力を意味する。太陽と月とは対極的である。

太陽光線はルーチという方向性と鋭さを感じさせる語で、一方月の光はスヴ

ェートという全てに行き渡る無限の広がりを感じさせる語で表現されている。そしてブルガーコフにおいてスヴェートは常に人を安息で満たす。例えば『赤い冠』の復活のコーリャの夢がそうである。この短編とMMとに共通に存在する観念連合及び対立概念は以下のように図式化される。



『白衛軍』の中の天国の夢からも分るように光とはこの世的なものではない。一方、太陽はこの世の生のシンボルである。つまりブルガーコフは、この世の生は不安であり、安息は死後与えられると考える。このような死生観は戯曲『疾走』のエピグラフに彼が引用したジュコフスキーの詩に顕著に現れている。「不死は静かな光の岸／それ目ざし駆けりゆく我等が旅／安らえや、己が走りを終えた者よ⁷⁾」—— ここには、この世の生が安息と光の岸（神の国）へと向う転変であるという理念が表わされている。これは『白衛軍』『悪魔叙事詩』『疾走』に一貫して現れている理念であるが、MMで繰返され、モスクワ物語においてイエシュアの思想（真理の国の到来）を伝えるマステルがソヴィエト社会の現実（この世の生）から不安を与えられるように、エルサレム物語において権力の存在しない真理の国の到来を主張する思想家を保護しようとするピラトが目に見えない圧力であるティベリウス帝という現実によって不安にさせられている。つまり作者は頭部シンボルを用いて、生と不可分の不安を表わしたのである。

第三に、「アダム の 頭 蓋」を 検 討 し よ う 。 MM の 中 で ゴ ル ゴ タ は 「 禿 げ 山 」 「 禿 げ の 頭 蓋 」 の 二 通 り に 表 現 さ れ て い る 。 周 知 の 通 り ， ゴ ル ゴ タ の 意 味 は 頭 蓋 であり、名 の 由 来 は ア ダ ム の 頭 蓋 が 埋 め ら れ て い る と い う 伝 説 に あ る 。 で は 何 故 そ れ が MM に お い て 「 禿 げ 」 と い う 語 を 伴 う の か と 言 え ば ， そ れ は 登 場 人 物 （ ベ ル リ オ ー ズ ， テ ィ ベ リ ウ ス 帝 ， ピ ラ ト ） の 頭 部 が 禿 げ て い る 事 に 関 連 し て い る 。 特 に 不 死 の 問 題 に 関 係 の あ る ベ ル リ オ ー ズ と ピ ラ ト が 禿 頭 で あ る 事 は 注 目 に 値 す る 。 就 中 ， 前 者 は 悪 魔 の 宴 で 頭 蓋 骨 の 盃 に 変 え ら れ る 事 から ， ゴ ル ゴ タ と の 観 念 連 合 は 明 白 で あ る 。 ブ ル ガ ー コ フ が 資 料 に し た 『 ブ ロ ッ ク ハ ウ ス

『エフロン百科辞典』のサバトの項にはキエフの禿げ山での悪魔の宴が書かれており、一方『白衛軍』で作者はこの山に触れている。この事から彼が悪魔の宴で禿げの頭蓋骨に血の注がれる場面を描く際、キエフの禿げ山と同名で呼ぶゴルゴタの丘でのキリスト磔刑でアダムの頭蓋に血が注がれた事を念頭に置いていた事には疑いの余地がない。MMで悪魔の宴は50号室で行われるが、これとキエフの禿げ山との関連を読者に気づかせる為、作者はキエフに住むベルリオーズの叔父というマイナーな人物を繰返し登場させる。そして何よりもまずキエフの禿げ山をめぐる伝説がムソルグスキーの曲で広く知られている事を想起されたい。以上の事は次の様に図式化される。

キエフの禿げ山	＝	(ルイサヤ・ゴラー)	＝	ゴルゴタの丘
悪魔の宴	――	(血)	――	イエスの磔刑
ベルリオーズの頭蓋	＝	(ルイスイ・チェーレブ)	＝	アダムの頭蓋

ブルガーコフにおいて、イエスは常に復活の光である。一方、アダムは人間の罪と死のシンボルである。換言すれば、悪の自由を持つ人間、悪を選択した為に光の中から追放され、死すべき存在となった人間の象徴である。ところで『疾走』のエピグラフの理念によればこの世の生は不安を伴う。そして不死とは光と安息に満ちた永遠の生命である。しかしMMのピラトが直観する不死とはこの世の不安を解消するものとしての死がない事を意味する。ニサン14日のピラトは「地獄の責苦のように燃える頭」(p. 28)をイエシュアに治してもらうが、死刑承認をめぐる「あれかこれか」の選択(その答えを出す瞬間が彼にとって最後の審判となる)を誤った為に、不安と苦悩の生を死後も猶生き続ける事になる。死はアダムの罪に対する罰であり、人間は等しくこれを受けるが、のみならず各人が悪の自由において犯した罪をも受けなければならない。死はむしろ復活の為に必要だが、光から追放されて闇を持つ(無知な[チョームヌイ])存在になった事から生じる罪ゆえに人間は復活に与る事ができない。作者がアダムの頭蓋で表わした事は復活後の生命の対立概念としての不安に満ちた地上の生とその延長である。復活はイエスの安息の光によって与えられる。人類が光の中へ戻る可能性を持つに至ったのは父祖アダムが十字架を伝って流れるイエスの血によって復活できた⁽⁸⁾からである。以上の事は次の様に図式化される。

ア ダ ム＝罪・死＝地上の生とその延長＝不安
 ↓ ↓ ↓ ↓
 イエシュア＝復 活＝復 活 後 の 生 命＝安息

この図式の中でアダムの部分は勿論ピラトに置き換える事ができる。即ち作者は不完全な地上の人間のシンボルとしてアダムの頭蓋を作品の中に繰返し登場させたのである。不完全な人間存在は光の中で安息を得るまで絶えず転変の中にいなければならない。これが地上の人間を支配する不安である。そしてこの不安の中で人間は罪を犯すが、それに対する罰は地上の生の終わりと同時に終わるものではない。なぜなら死後も魂は存在し続けるからである。不死ゆえに永遠に続く苦悩から解放される時、人間は光の中へ入る事ができる。これが頭部シンボルを用いて作者の説いた事である。畢竟ブルガーコフが最も強く主張しようとした事は、神の存在、人間を地上の生の不安から解放する復活、安息と光の国の存在であった。

- 注(1) Bruce A. Beatie & Phyllis W. Powell “Story and symbol: Notes towards a structural analysis of Bulgakov’s THE MASTER AND MARGARITA”, Russian Literature, Triquarterly, No. 15, pp. 219-252.
- (2) см. “Неизданный Булгаков: Тексты и материалы”, под ред. Эллендея Проффер, США Ардис, 1977, с. 211-213.
- (3) “MM” pp. 38-39 を参照されたい。
- (4) М. Ф. Достоевский, Полное собрание сочинений, том 15, Л., Наука, 1976, с. 78.
- (5) 『赤い冠』については拙稿 (“Анализ рассказа М. Булгакова ‘Красная корона’”, 《ロシア文学1920年代》第2号, 1983, pp. 50-62) を参照されたい。
- (6) MMにおける2セクションのパラレルについては拙稿 (『《Мастер и Маргарита》研究—形象の源泉をめぐって—』, 《RUSISTIKA》I, 東京大学文学部露文研究室年報1981, pp. 92-97) を参照されたい。
- (7) Бессмертье—тихий, светлый брег; Наш путь—к нему стремление. Покойся, кто свой кончил бег! (М. Булгаков “Драмы и комедии” с. 125)
- (8) 「十字架の伝説」については BP の論文 p. 234 に詳しい。また聖書の外典及び民間伝承に取材したキリスト伝説については、次の本に詳しく述べられている。Donehoo, James de Quincy “The Apocryphal and Legendary Life of Christ”, New York, 1903.

《テキスト》

本文中の数字は以下のテキストの頁による。

- ・『マステルとマルガリータ』“Мастер и Маргарита”, Франкфурт, Посев, 1969.
- ・『赤い冠』“Красная корона”, Ранняя неизданная проза, Arbeiten und Texte zur Slavistik · 12, München, Otto Sagner in Kommission, 1976.
- ・『悪魔叙事詩』“Дьяволиада”, Рассказы, Москва, Недра, 1925.
- ・『疾走』“Бег”, Драммы и комедии, Москва, 1965.
- ・『白衛軍』“Белая гвардия”, Романы, М.-Л., Художественная литература, 1973.

The meaning of Head-symbol in M. Bulgakov's “The Master and Margarita”

Satoyo AKIMOTO

The aim of this paper is to analyze the symbolization of the heads in “The Master and Margarita”.

The heads in “The Master and Margarita” could be separated into three categories: 1. cut-off heads, 2. sick heads, 3. The Adam's Head. The cut-off heads symbolize the immortality of man's soul. The sick heads symbolize unquiet of man in this world. The Adam's Head is the symbol of man's sin and punishment for it.

The most important figure of the first category is Berlioz's head. It continues to live after being cut off. The story about Berlioz begins with the discussion of immortality. After Woland's prediction, the tram deprives Berlioz of his head. And his head is stolen during his burial. It is brought to the Satan's Ball, and then Woland proves the immortality of soul after bodily death. Berlioz reminds us of the atheistic thinker to whom Ivan Karamazov's nightmare refers, and who didn't believe in the existence of another world. By the way, Pilate also continues to live with a guilty conscience after he physically died. The nightmare in Dostoevsky's novel discourses on the connection between man's conscience and immortality. As for Pilate, he got intuition of immortality, which was mixed with the idea that he shouldn't condemn Yeshua (this idea is symbolized by a swallow), but he ignored it. If he had known that his soul shouldn't stop to live forever, he would have freed, in defiance of Tiberius' anger, the philosopher who asserted any power to be oppression for people. He had

rather been punished by Tiberius than been punished by his own conscience endlessly. Bulgakov embodies the problem of immortality in Pilate, which is repeated by Head symbol in the figure of Berlioz.

The second category is concerned with Pilate's headache and the vision of Tiberius' head. Bulgakov considers a man's head as the place on which all his being is concentrated. It can be said, relating to both Pilate and the hero of "Дьяволияда", that man's headache is connected with unquiet which is the attribution of his life in this world. The head of Kolya in "The Red Crown" is equivalent to Tiberius' head on which sits a spiked golden crown, with a round ulcer on its forehead. Both heads have crowns (корона), and they are associated with the sun. According to Bulgakov's conception, sunray (луч) is unquiet, on the other hand moonlight is quiet. The heads which are related with the sun make heroes unquiet. To the contrary, the moonlight which is the attribute of Yeshua gives Pilate quiet. He couldn't help condemning Yeshua when he saw the vision of Tiberius' head. Pilate's own sick head symbolizes unquiet in his soul, and Tiberius' sick head symbolizes the power which gives Pilate unquiet from outside.

The Adam's Head is concerned with Golgotha which is called Bald Mountain. This name reminds us the mountain in Kiev, where the witches' Sabbath takes place. Berlioz's Head is related with the Adam's Head on which, according to the Legend of the Cross, Christ's blood was poured at the time of the Crucifixion (and Adam was released from his sin).

The Head-symbol represents the author's view that man's life in this world consists in ceaseless change; man is filled with constant inquietude, and peace exists only in the light of God.